

【連載：「私とオーディオの出会い」 Vol.3】

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 小川 理子

私が音響研究所新入社員当時の小幡所長は、テクニクスのダイレクトドライブターンテーブルの生みの親として有名な方であったが、その頃の直近では光ディスク開発の責任者をされていた。アナログにせよ、デジタルにせよ、音を記録する媒体に深く関わってこられたので、音の出口であるスピーカー開発をしていた私たちに対して、収録技術を理解することが重要だと常々おっしゃっていた。それまで、別の用途でダミーヘッドマイクロホンを使っての実験はよくしていたが、収録となると、まるで経験がなかった。

またその頃、ニューヨークシンフォニックアンサンブルという米国の室内管弦楽団のスポンサーを、アメリカ松下電器が引き受けていた。楽団の指揮者は、高原守さんという日本人で、日本のツアーを実行するにあたりスポンサーが必要とのことで、アメリカ松下電器会長から小幡所長宛に依頼がきて、技術部門でご支援をすることになった。

高原さんは実に気さくな方で、ご支援いただくからには自分たちの楽団の演奏を研究でどんどん活用してください、ということをお願いし出てください、お言葉に甘えて、私と同期入社の伊達くんの二人で、マイクロホンとポータブル DAT をコンサートホールに持ち込んで、収録させていただくことにした。

最初はワンポイント収録から、おそろおそろ始めたが、マイクロホン設置場所の違いによる収録音源の出来上がりがこうも違うものかと、目からウロコであった。

収録に関する多くの資料から二人で自力で学び、だんだんとマイクロホンの数や種類を増やし、数年後には社内のメセナ活動の CD 制作を任せていただいたり、他社様のメセナ活動の CD 制作を頼まれるようになった。中でも、トヨタ自動車さんのメセナ活動でウィーンフィルのメンバーを招聘される機会があり、首席クラリネット奏者ペーターシュミードルさんによるモーツァルトのクラリネット協奏曲を収録させていただき、CD として完成させるまでには、大変な緊張感の持続が必要だった。

しかしながらそれまで、ニューヨークシンフォニックアンサンブルで、何回もこの曲の収録にはトライしていたので、クラリネットのバランスの良い響き、厚み、柔らかさ、温かさを出すには、マイクロホンセッティングがどうあるべきかを、かなり研究していて、それが功を奏したと思う。シュミードルさんにも、トヨタ自動車さんにも大変喜んでいただいた。

こんな経験が、あとあと、ハイレゾリューション関連の様々な開発に役立った。初めての96kHz/24bitのディスク化は、DVDビデオ規格の高音質収録盤ということで、渡辺香津美さんと福田進一さんのギターデュオ。山梨の山奥の小さなホールで行い、私と伊達くんが開発した初のハードディスクレコーダーを持ち込んで、収録させていただいた。機材がちゃんと動いてくれる

か、最後までハラハラドキドキ、何とか乗りきって、完成した DVD は、パナソニックのコンテンツ制作会社から発売していただいた。お二人の演奏が素晴らしく、楽器も貴重な多様なものを持ち込んでいただき、曲に応じてギターを替える、という素晴らしい試みだったし、音質も良いとのことで AV 専門誌から賞をいただいた。

今のハイレゾリューション化は、私たちにとっては、1980 年代からの経験の蓄積だと言っても過言ではない。

次回に続く。。。